瀬田の丘

創刊 1973 年
編集・発行 / カトリック瀬田教会信徒会広報部
東京都世田谷区瀬田 4-16-1



今日のみことば
年間第三十二主日Ａ年（２０２６年１１月８日）

主任司祭　小西　広志

第一朗読　知恵の書6章12-16節
第二朗読　テサロニケの信徒への第一の手紙4章13-18節
福音朗読　マタイ福音書25章1-13節

今日の福音朗読は「十人のおとめ」のたとえの箇所です。少し黙想しながら、じっくりと読んでみましょう。

【導入：伝統的な解釈への違和感】
教父以来、花婿はキリストであると理解されてきました。ですから、このたとえの意味は「再臨に備えよ」と解釈されるのが一般的でしょう。このような読み方では、油は分け与えられない信仰や善行、ともし火は聖霊の火とされます。しかしそれでは、婚宴という喜びの物語が裁きや脅しの話になってしまいます。わたしは、この点に腑に落ちないものを感じましたので、このたとえを改めて丁寧に読み直してみました。

【本文と背景】
多くの学者は、このたとえを初代教会の創作と見ています。そうではなくイエスさまの実際の言葉にさかのぼると考える学者もいます。それでも冒頭（1節）と結び（13節）がマタイの加筆である点では、どの学者たちもほぼ一致しています。それでも、わたしたちはイエスさまの言葉として受け取りましょう。

当時のパレスチナの婚姻は二段階で行われました。第二段階では、新郎が新婦の父と契約を交わし、成立すると新婦の家から新郎の家へ行列が向かいます。新郎の家が婚宴の場所だからです。その行列に、おとめたちがともし火を持って歌と踊りで付き添いました。

【語句と疑問点】
「おとめ」は12-13歳ほどの新婦の友人たちです。付き添い役をうまく果たすことは、良い嫁になれることを示す場でもあったのです。

「ともし火」（ランパス）は通常トーチを指し、15分ほどしか燃えません。
疑問①（場面）：宴の会場で油が切れたり、夜中に買いに行ったりするのは不自然です。おと

めたちは新婦の家で待っていたと理解したらよいでしょう。
疑問②（油を分けない理由）：賢いおとめたちは、晴れ着姿の仲間を夜の町へ追いやります。役割を完璧に果たす「賢さ」が、できない者を切り捨てています。なにか、そこに現代の競争社会の縮図を見てるかのようです。

最大の疑問（ホスピタリティの欠如）：大切なゲストを「知らない」と締め出す主人は、もてなしを重んじる当時の伝統に反します。このたとえには、おとめ同士の助け合いも、執り成す人物も、花嫁さえも登場しません。ローマ支配下で支え合って生きた庶民の「優しさ」が、この話にはないかのようです。

【まとめ：逆説のたとえとして】
1節は「天の国は、これと比べてみなさい」とも訳せます。そう読むと、これは逆説のたとえだったのかもしれません。イエスさまは聴き手に「この主人や賢いおとめたちの冷たさに釈然としないでしょう？」と問いかけようとしたのではないでしょうか。　　そして、「あのね、天の国はこの世のあり方とはまったく違うんだよ。だから、神さまは賢いおとめたちだけを受け入れて、愚かなおとめたちを受け入れない方ではないんだよ。天の国の祝宴は、誰もが入れる祝宴なんだよ」と伝えたかったのではないかと思います。

ただし、これは少し変わった読み方かもしれません。そのうえで、11月は終末を黙想する時でもあるので、再臨まで聖霊の火をともし続ける「賢いおとめ」であろうという伝統的な受け止め方もよいでしょう。